

全般季節予報支援資料 1か月予報

2025年1月9日

予報期間：1月11日～2月10日

この資料は、気象事業者等が、気象庁の提供する季節予報の根拠を理解するための補助資料であり、そのままの形で一般に提供することを想定して作成したものではありません。

特に注意を要する事項

北日本では、期間の前半は気温がかなり高くなる可能性があります。

出現の可能性が最も大きい天候

北日本日本海側では、平年に比べ曇りや雪の日が少ないでしょう。
東・西日本日本海側では、平年に比べ曇りや雪または雨の日が少ないでしょう。
北・東・西日本太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
沖縄・奄美では、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

全般1か月予報

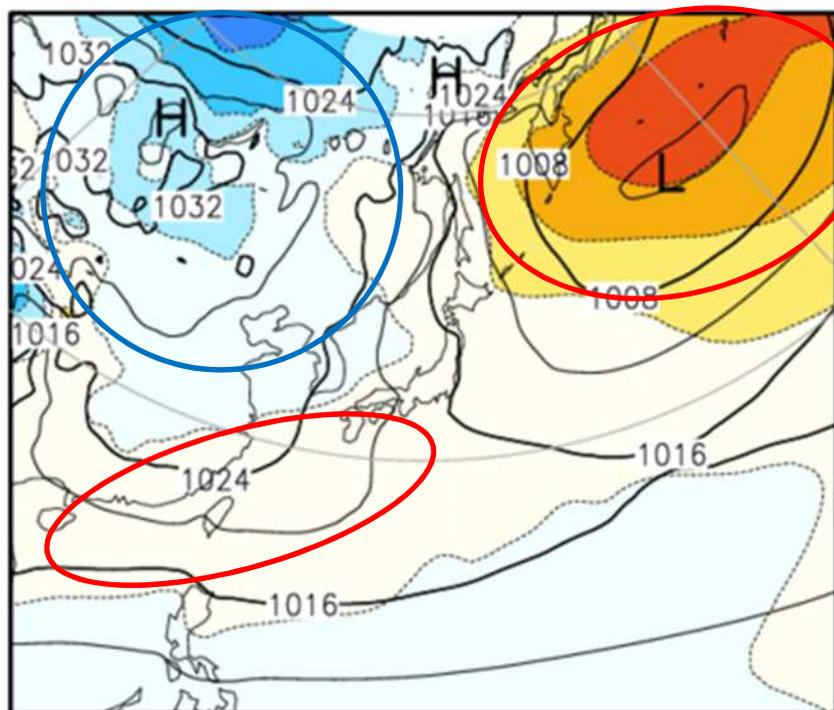
1か月		気温(%)	降水量(%)	日照時間(%)	降雪量(%)
		低並高	少並多	少並多	少並多
北日本	日本海側	10:30:60	50:30:20	20:30:50	50:30:20
	太平洋側		30:40:30	30:40:30	
東日本	日本海側	20:30:50	40:40:20	20:30:50	50:30:20
	太平洋側		30:40:30	30:40:30	
西日本	日本海側	30:30:40	40:40:20	20:40:40	50:30:20
	太平洋側		30:40:30	30:40:30	
沖縄・奄美		40:40:20	30:40:30	30:40:30	

気温	1週目(%)	2週目(%)	3~4週目(%)
	低並高	低並高	低並高
北日本	10:30:60	10:30:60	20:30:50
東日本	20:50:30	10:40:50	20:40:40
西日本	40:40:20	20:40:40	30:30:40
沖縄・奄美	70:20:10	30:40:30	30:40:30

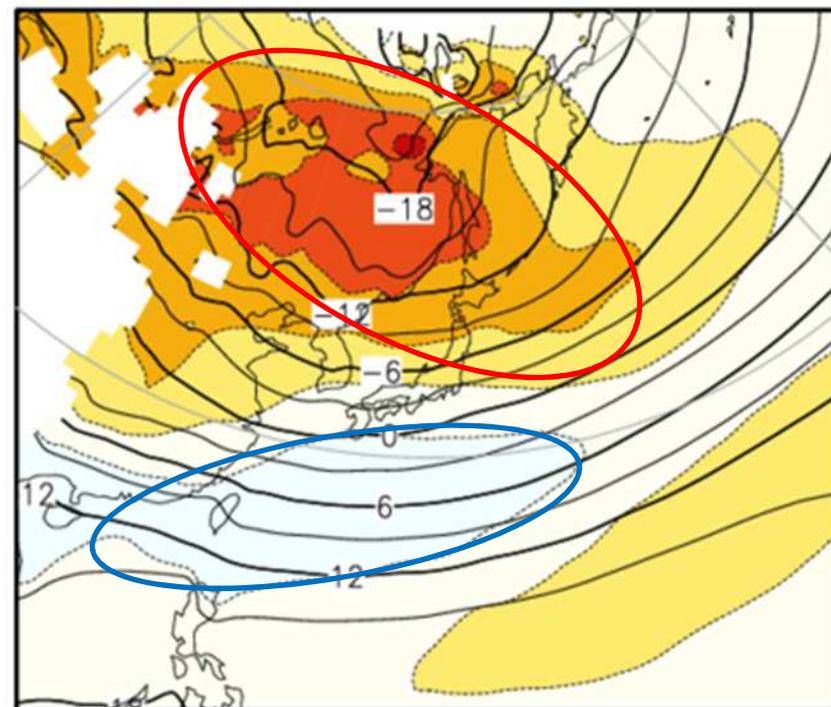
全般予報のポイント

- ・北日本を中心に寒気の影響を受けにくいいため、向こう1か月の気温は、北・東日本で高いでしょう。特に、北日本では、期間の前半は気温がかなり高くなる可能性があります。
- ・冬型の気圧配置が長続きしないため、向こう1か月の降水量は、北日本日本海側では少なく、東・西日本日本海側では平年並か少ないでしょう。向こう1か月の降雪量は、北・東・西日本日本海側で少ないでしょう。向こう1か月の日照時間は、北・東日本日本海側では多く、西日本日本海側では平年並か多いでしょう。
- ・沖縄・奄美では、期間のはじめに寒気の影響を受けやすいため、向こう1か月の気温は、平年並か低いでしょう。

海面気圧(1か月)



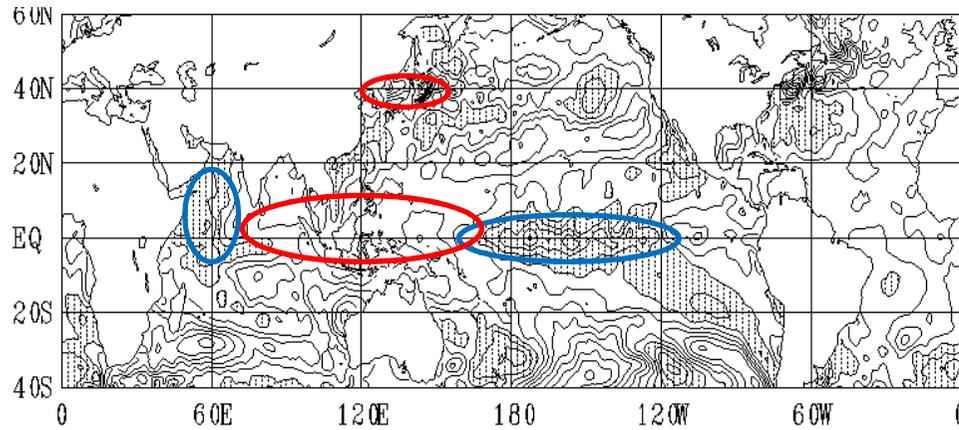
上空約1500mの気温(1か月)



1か月平均の海面気圧(左図)は、アリューシャン低気圧が弱いでしょう。一方、シベリア高気圧は、南東への張り出しはやや強いですが、中心では弱いでしょう。このため、日本付近では冬型の気圧配置が長続きしないでしょう。

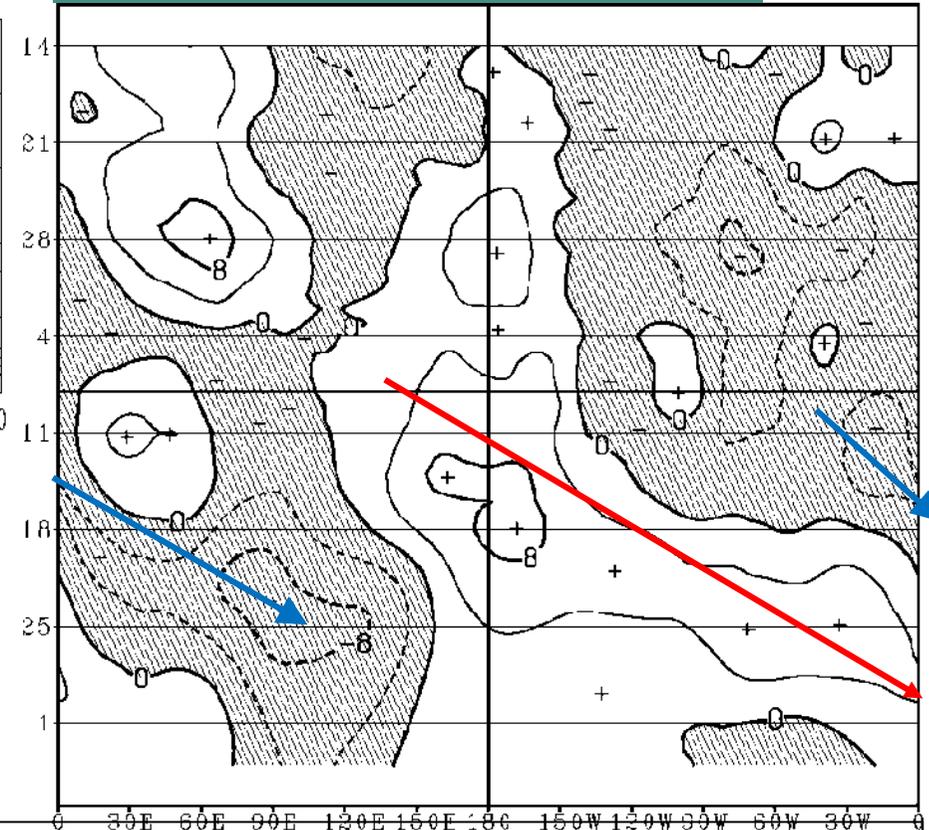
上空約1500mの気温(右図)は、沖縄・奄美では平年より低く、寒気の影響を受ける時期があるでしょう。一方、北・東日本では平年より高く、寒気の影響が弱いでしょう。

SST偏差



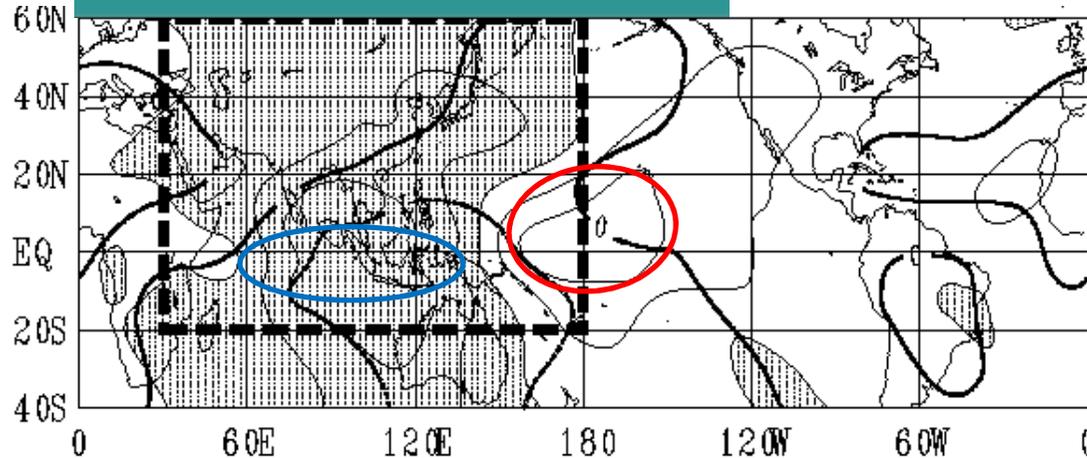
熱帯域では、インド洋西部で負偏差。インド洋東部から太平洋西部にかけて正偏差。太平洋赤道域中部で負偏差。ラニーニャ現象的なSST偏差分布。日本海北部から日本の東にかけて正偏差。

200hPa速度ポテンシャル偏差



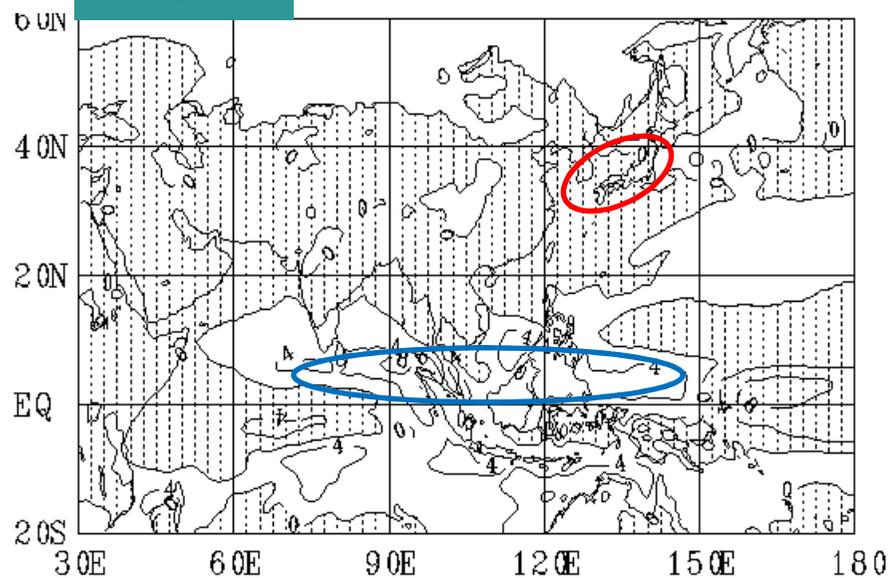
赤道季節内振動(MJO)に伴い、実況の日付変更線付近の対流不活発域、南米付近の対流活発域がそれぞれ東進し、期間の後半はインドネシア付近で対流が活発。この領域での活発化にはラニーニャ現象的なSST偏差も寄与。

200hPa速度ポテンシャル



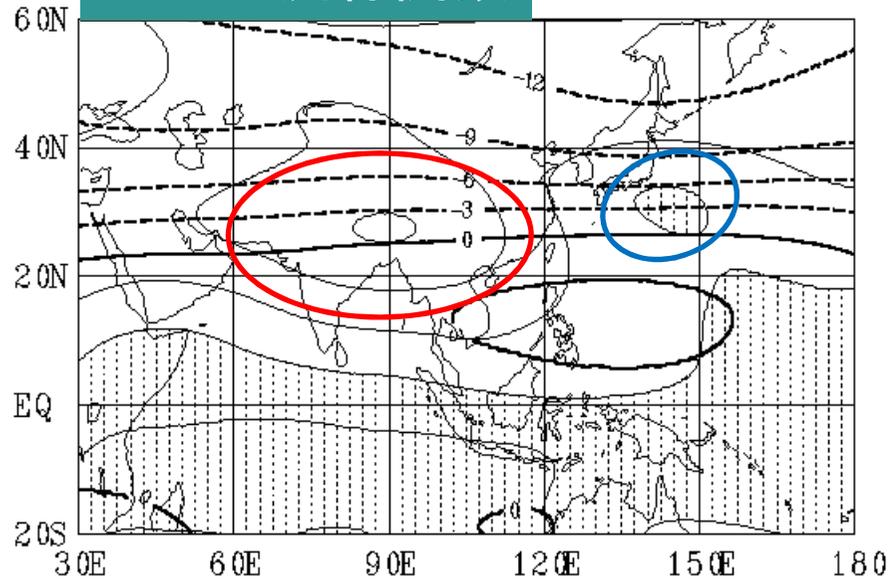
熱帯の対流活動に対応して、インド洋中部からインドネシア付近にかけて上層発散偏差の一方、太平洋中部で上層収束偏差。

降水量



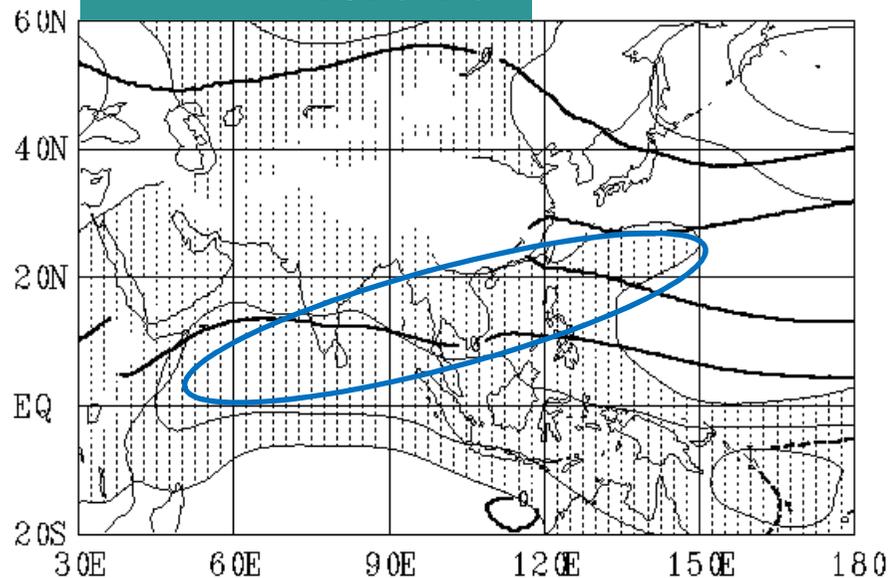
インド洋中部の熱帯域からニューギニアの北にかけて多雨偏差。日本付近では、日本海側を中心に少雨偏差。

200hPa流線関数



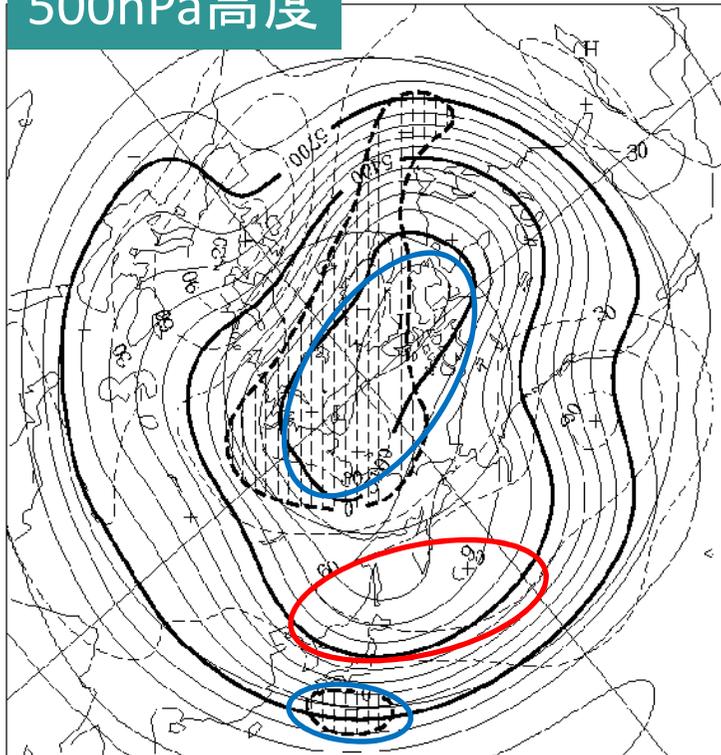
パキスタンから華南にかけて高気圧性循環偏差、日本の南東で低気圧性循環偏差。これらは、熱帯対流活動に強制された亜熱帯ジェット気流沿いの波列に対応。

850hPa流線関数



熱帯の対流活発の影響で、インド洋から日本の南にかけて低気圧性循環偏差。

500hPa高度

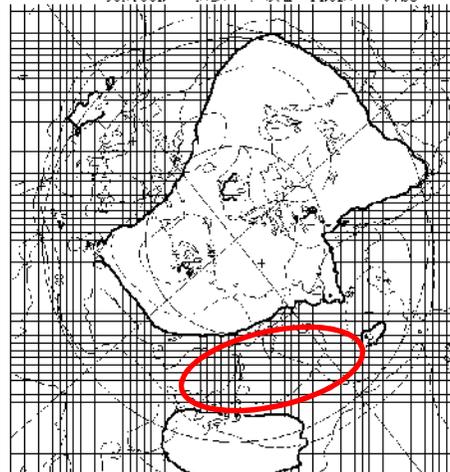
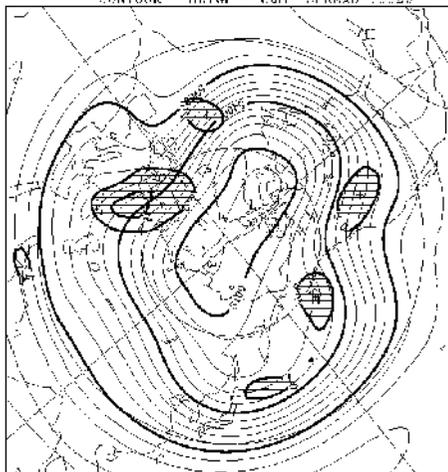


500hPa SPREAD AND HEIGHT

PROJ. OF T. AKOMATSU AND S. J.

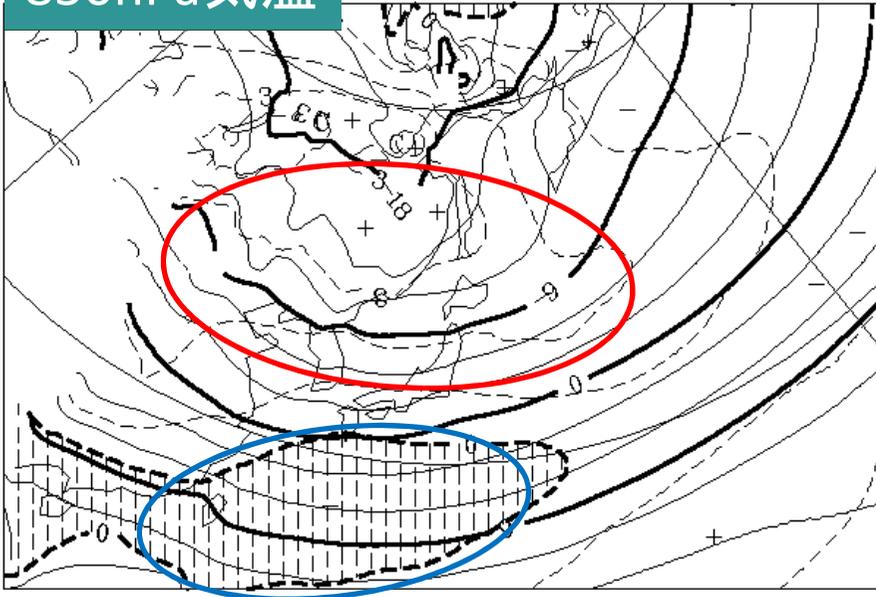
CONTOUR HEIGHT: 60m SPREAD: 0.25

CONTOUR: 5.0m FEBR. 0.25



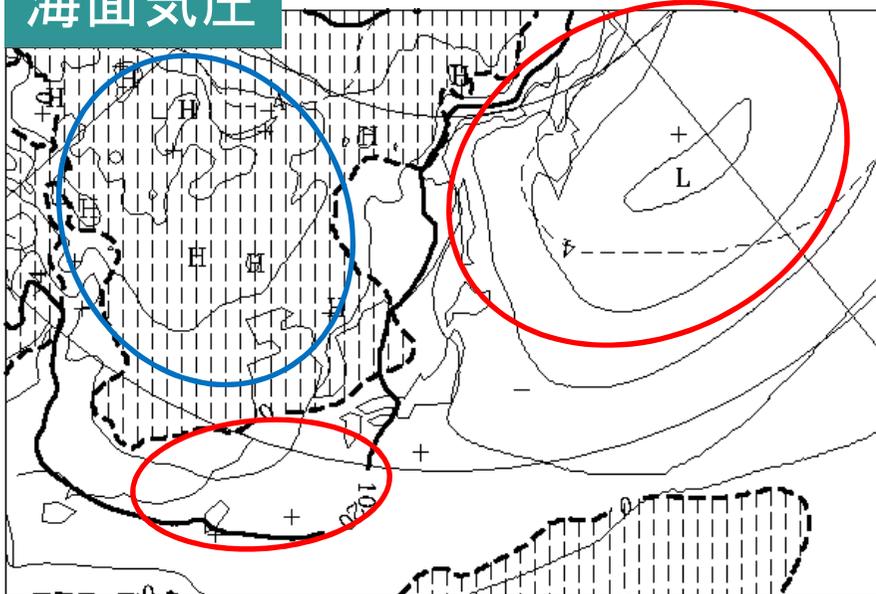
極域で極渦が強く負偏差で、中緯度帯で正偏差。中緯度への寒気流入が弱い正の北極振動(AO)に対応。日本付近は北日本を中心とする正偏差だが、日本の南には負偏差域もある。北日本には正の高偏差確率50%以上の領域がかかる。

850hPa気温



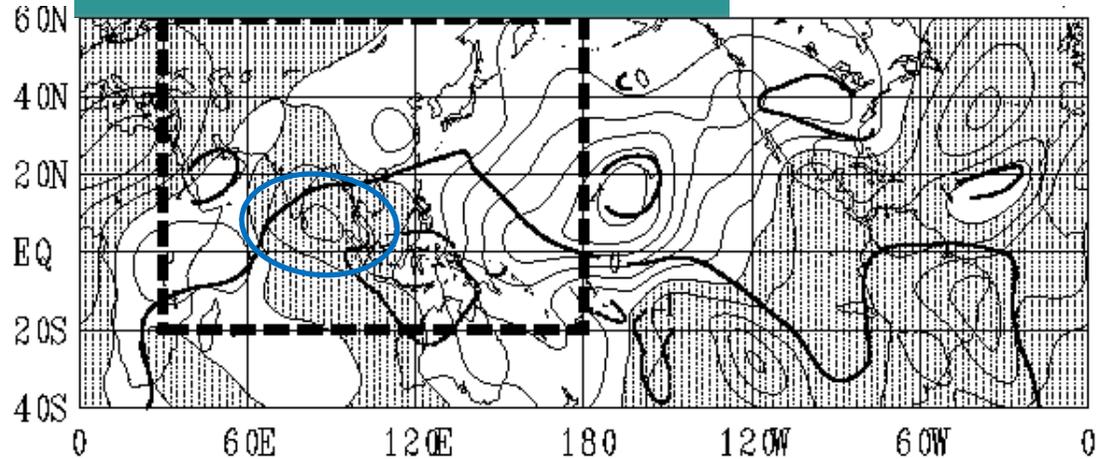
沖縄・奄美では平年より低く、北・東日本では平年より高い。正偏差の中心は、中国東北区から北海道の東にかけてで、日本付近では気温の南北の傾きが平年より小さい。

海面気圧



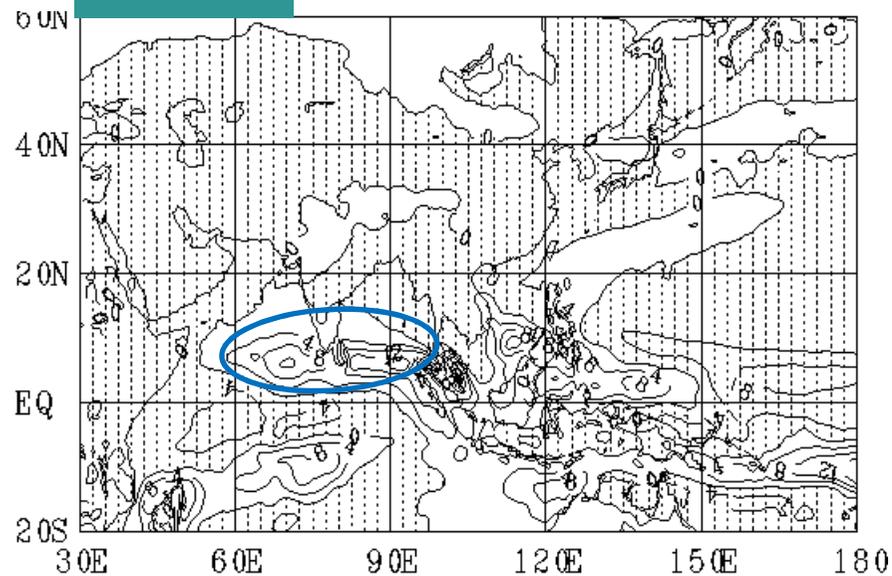
アリューシャン低気圧が弱く、正偏差。一方、シベリア高気圧は、その中心では弱いが南東への張り出しはやや強い。日本付近では冬型の気圧配置が長続きしない一方、沖縄・奄美では下層寒気の影響を受けやすい時期がある。

200hPa速度ポテンシャル



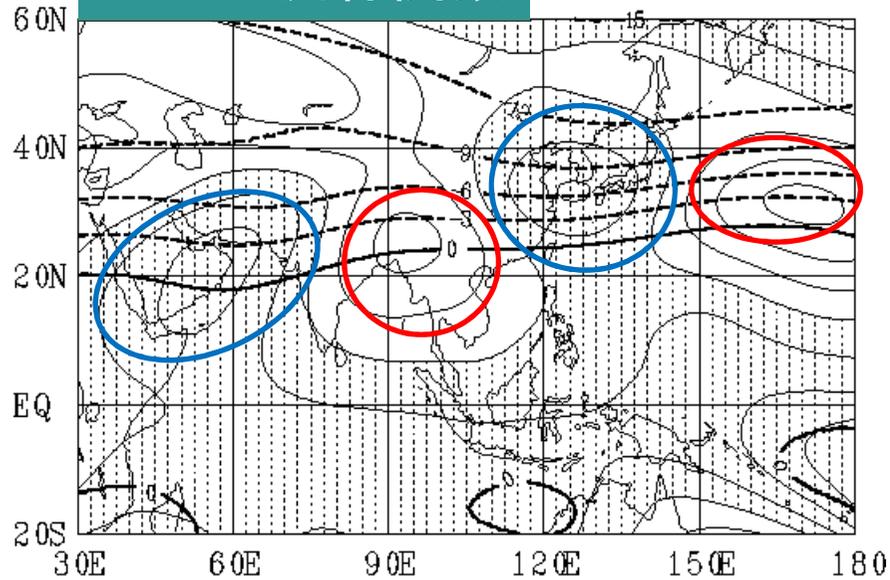
熱帯域のインド洋中部～東部で上層発散偏差。

降水量



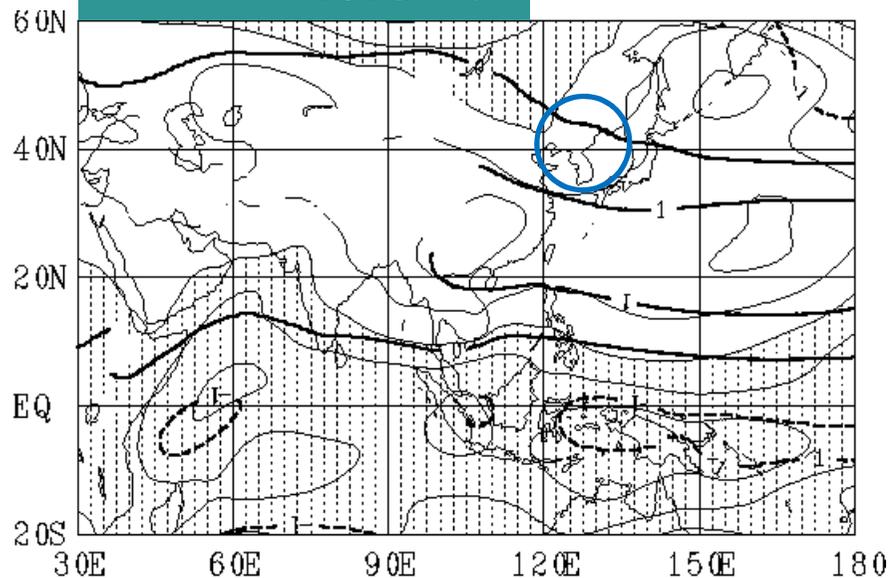
熱帯域のインド洋中部～東部で多雨偏差。

200hPa流線関数



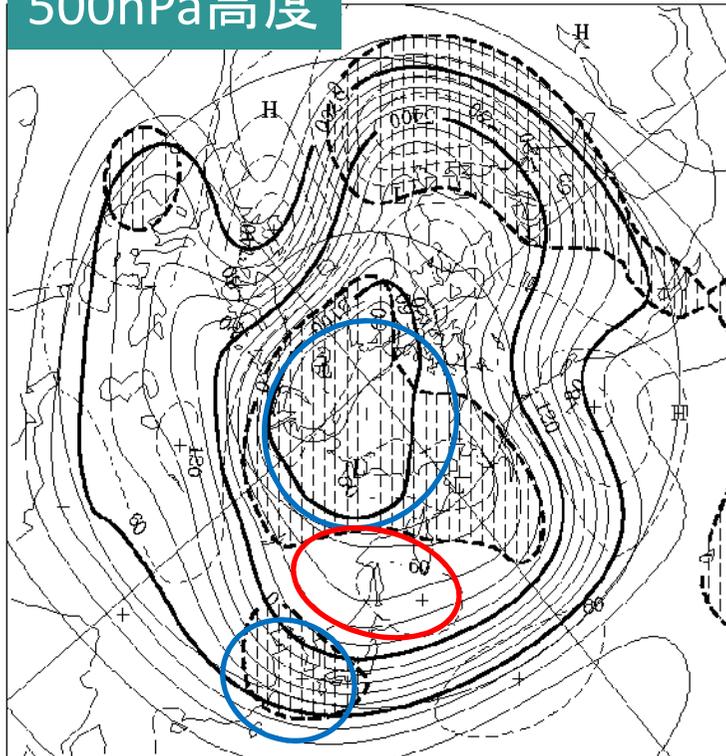
亜熱帯ジェット気流沿いの波列が明瞭で、その一環として朝鮮半島付近に低気圧性循環偏差。

850hPa流線関数



上層の波列に対応して、朝鮮半島付近に相対的な低気圧性循環偏差。

500hPa高度

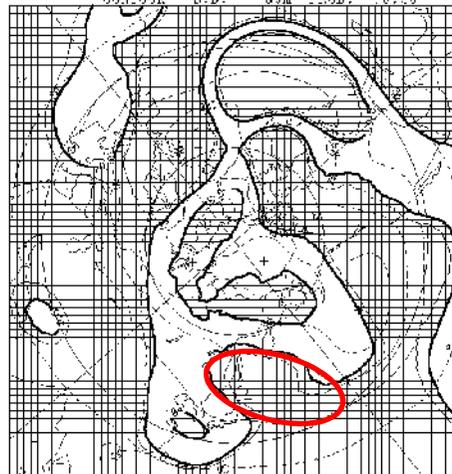
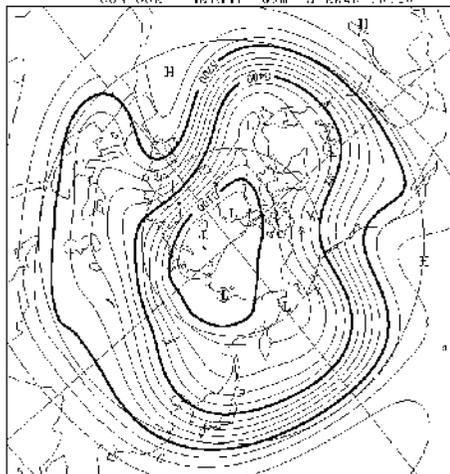


極域で極渦が強く負偏差で、その周りは正偏差。日本付近では、北日本はオホーツク海付近を中心とする強い正偏差域に覆われ、正の高偏差確率50%以上の領域がかかる。一方、西日本と沖縄・奄美は東シナ海付近のトラフに対応する負偏差域に覆われる。

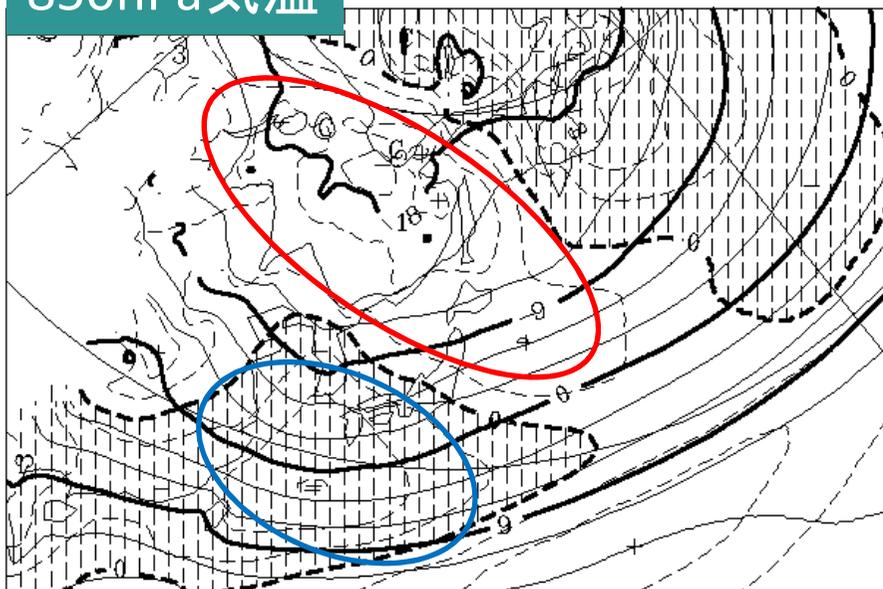
500hPa SPREAD AND HEIGHT
CONTOUR HEIGHT: 63m SPREAD: 0.20

PROB. OF H. ANOMALY AND S.D.

CONTOUR S.D.: 33m PROB.: 0.25

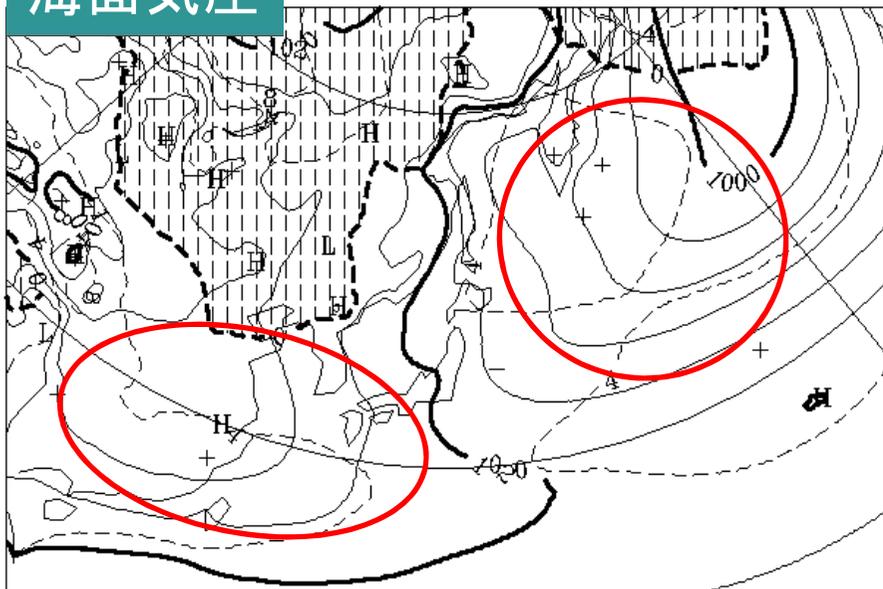


850hPa気温



北日本は、中国東北区付近を中心とする正偏差域に覆われる一方、西日本から沖縄・奄美は、華南から伸びる負偏差域に覆われる。

海面気圧



アリューシャン低気圧が弱く、冬型の気圧配置が長続きしない。一方、シベリア高気圧が華南付近で強く、西日本まで張り出し、下層寒気をもたらす。

想定される天候

- ・ 北日本日本海側では、平年と同様に曇りや雪の日が多いでしょう。
- ・ 東・西日本日本海側では、平年と同様に曇りや雪または雨の日が多いでしょう。
- ・ 北・東・西日本太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
- ・ 沖縄・奄美では、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

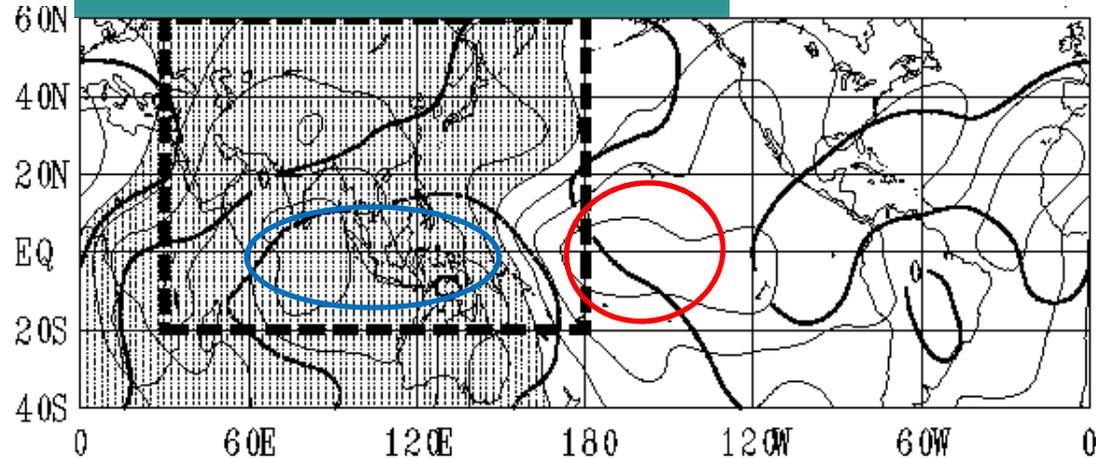
<気温>

・北日本は寒気の影響が弱いため高温、沖縄・奄美は寒気の影響が強いため低温。その間の東日本は並温、西日本は低温傾向。

<天候>

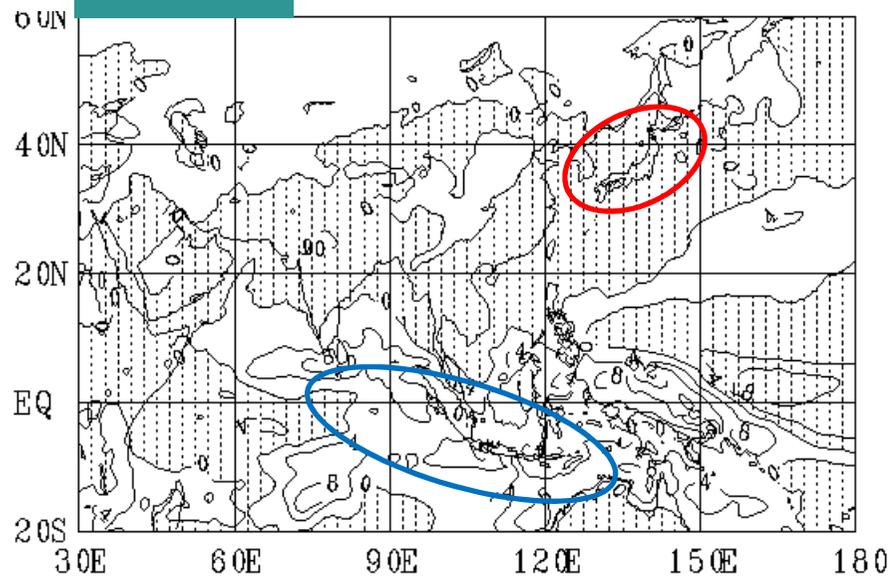
・北・東・西日本日本海側では、冬型の気圧配置が続かないが、低気圧の影響などで、天候は平年と同様と見込む。

200hPa速度ポテンシャル



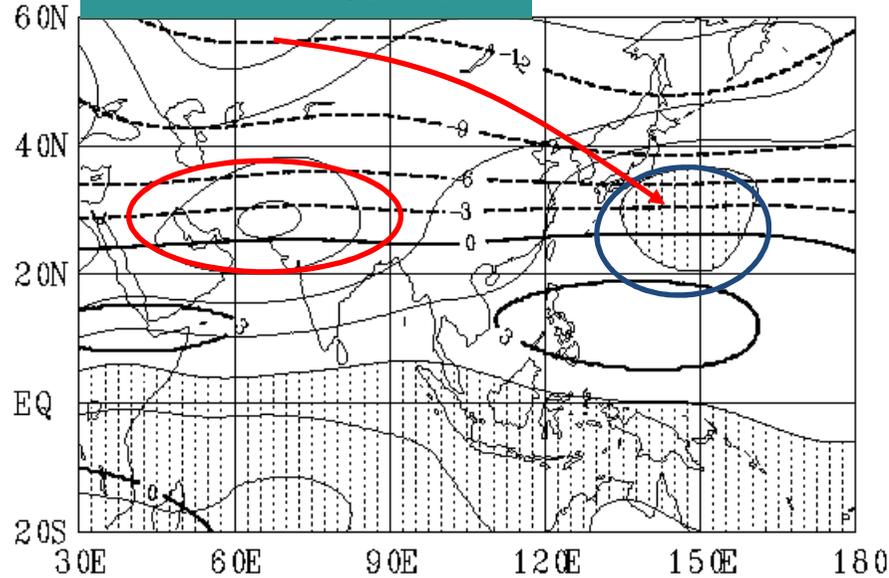
熱帯域のインド洋中部からインドネシア付近にかけて上層発散偏差。
太平洋中部で上層収束偏差。

降水量



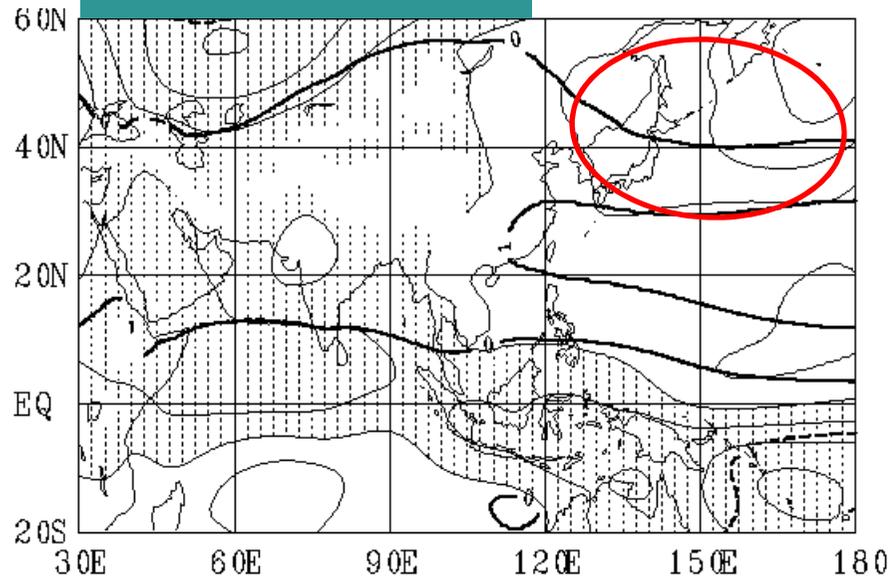
熱帯域のインド洋中部からインドネシア付近にかけて多雨偏差。
日本付近はおおむね少雨偏差。

200hPa流線関数



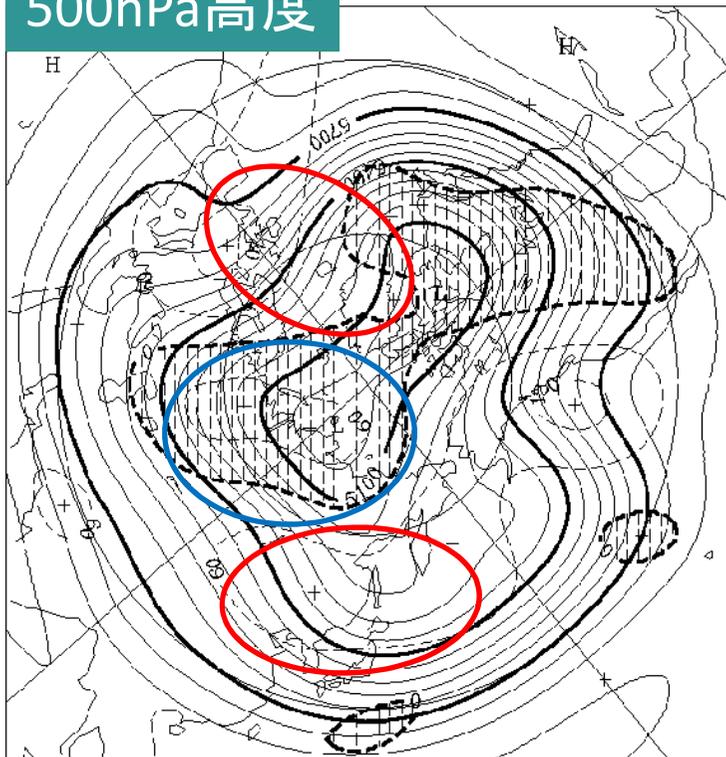
アラビア半島からミャンマー付近にかけて高気圧性循環偏差、日本の南に低気圧性循環偏差。これらは、熱帯対流活動に強制された亜熱帯ジェット気流沿いの波列に対応。ただし、日本の南の低気圧性循環偏差には高緯度側からの影響もある。

850hPa流線関数



日本付近から東海上にかけて高気圧性循環偏差。

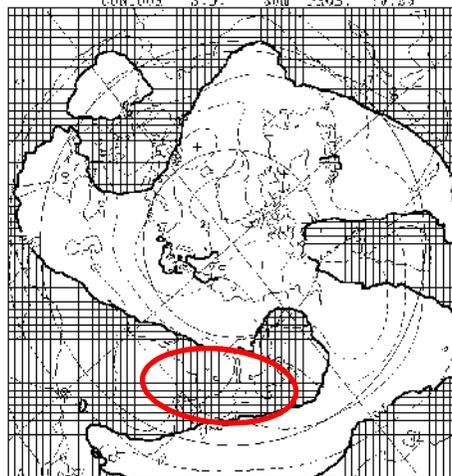
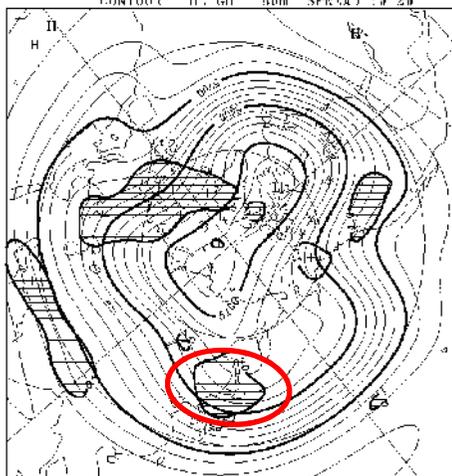
500hPa高度



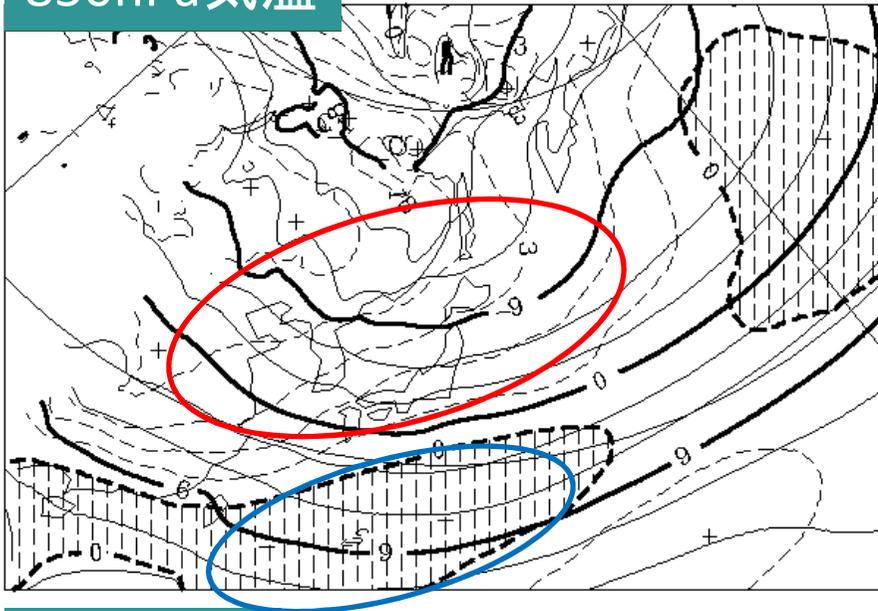
寒帯前線ジェット気流沿いの波列の一環として、華北から日本の東にかけて正偏差が強く、北・東日本は正の高偏差確率50%以上の領域に覆われ、寒気の影響を受けにくい。但し、スプレッドが大きいことには留意。

500hPa SPREAD AND HEIGHT

PROB. OF H. ANOMALY AND S.D.

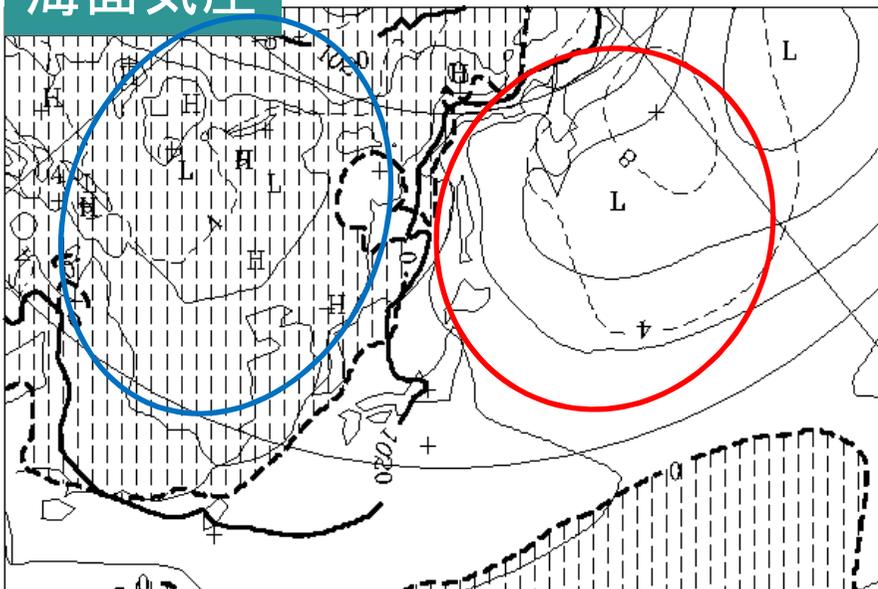


850hPa気温



北日本を中心に沖縄・奄美を除き正偏差に覆われる。一方、日本の南には負偏差域が広がり、日本付近での南北の温度の傾きが弱い。

海面気圧



アリューシャン低気圧、シベリア高気圧ともに弱く、冬型の気圧配置は長続きしない。

想定される天候

- ・ 北日本日本海側では、冬型の気圧配置が続かないため、平年に比べ曇りや雪の日が少ないでしょう。
- ・ 東・西日本日本海側では、冬型の気圧配置が続かないため、平年に比べ曇りや雪または雨の日が少ないでしょう。
- ・ 北・東・西日本太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
- ・ 沖縄・奄美では、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

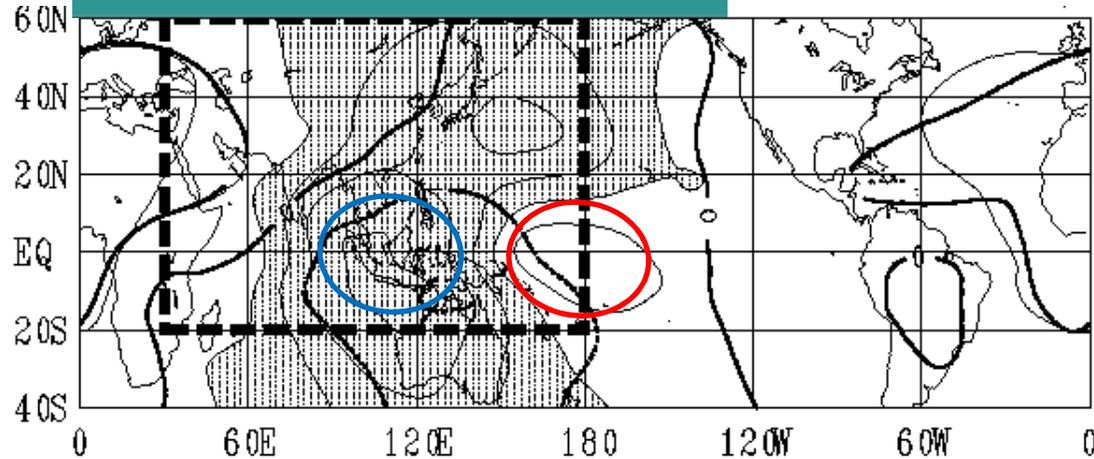
<気温>

・寒気の影響を受けにくいいため、北・東日本は高温で、北日本ではかなりの高温となる可能性がある。西日本は高温傾向。沖縄・奄美ではほぼ平年並。

<天候>

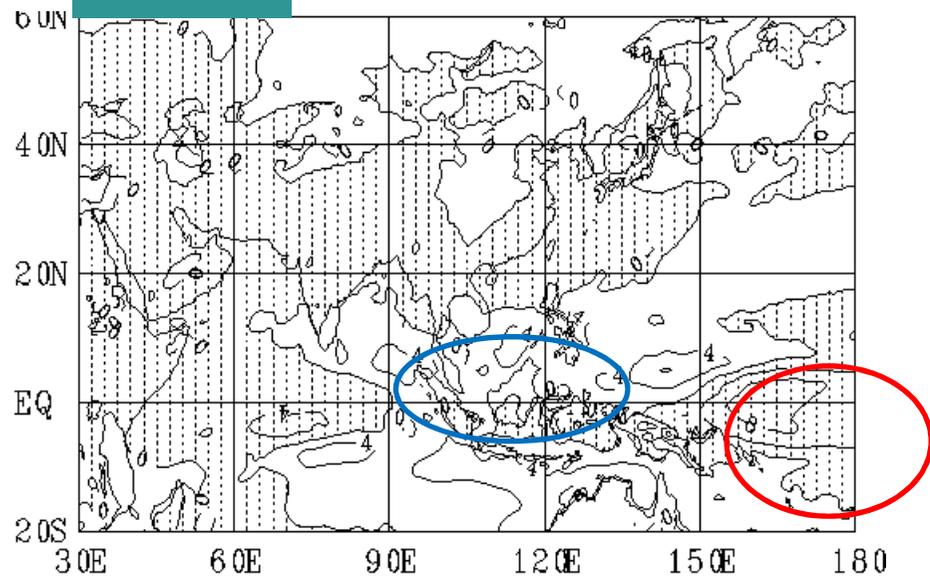
・北・東・西日本日本海側では、冬型の気圧配置が続かない。

200hPa速度ポテンシャル



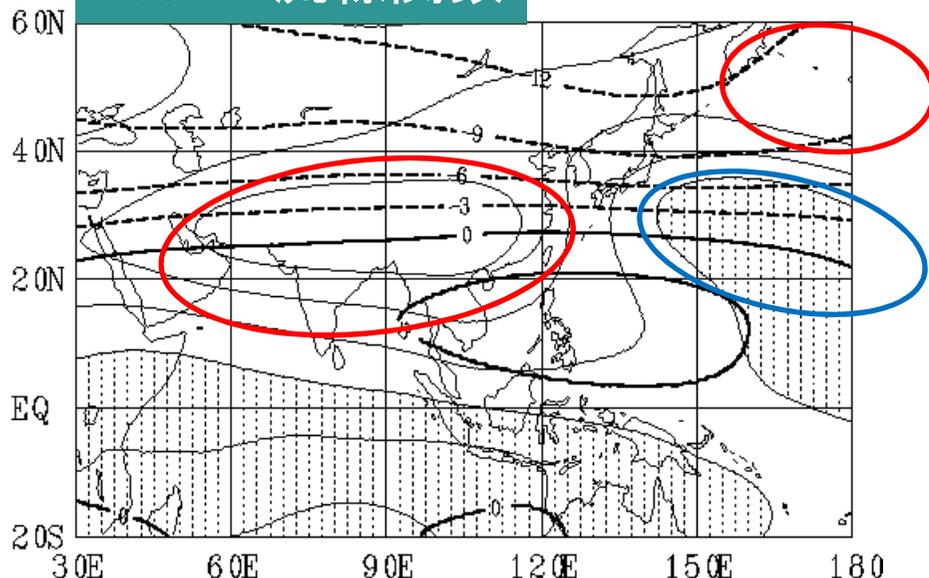
インドネシア付近で上層発散
偏差、日付変更線付近で上
層収束偏差。

降水量



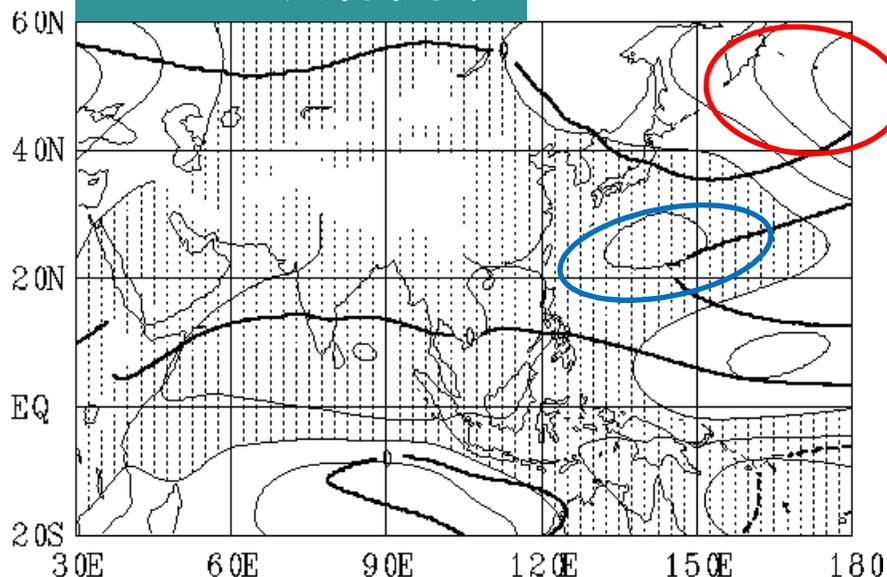
インドネシアからフィリピン付近
にかけて多雨偏差、日付変更
線付近で少雨偏差。

200hPa流線関数



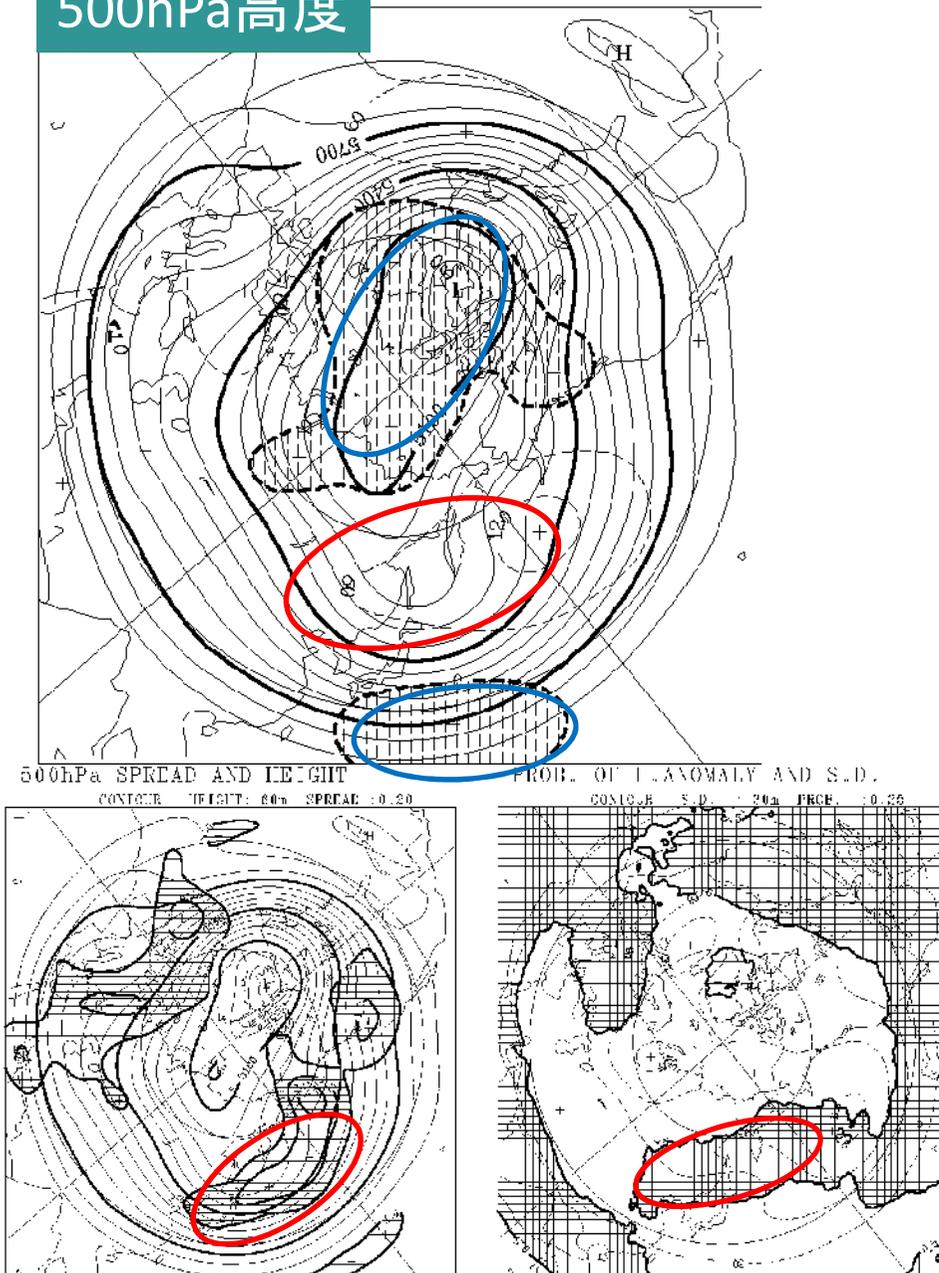
アラビア半島から華南付近にかけて高気圧性循環偏差、日本の南東に低気圧性循環偏差。アリューシャン近海に高気圧性循環偏差。熱帯対流活動の影響を示唆。

850hPa流線関数



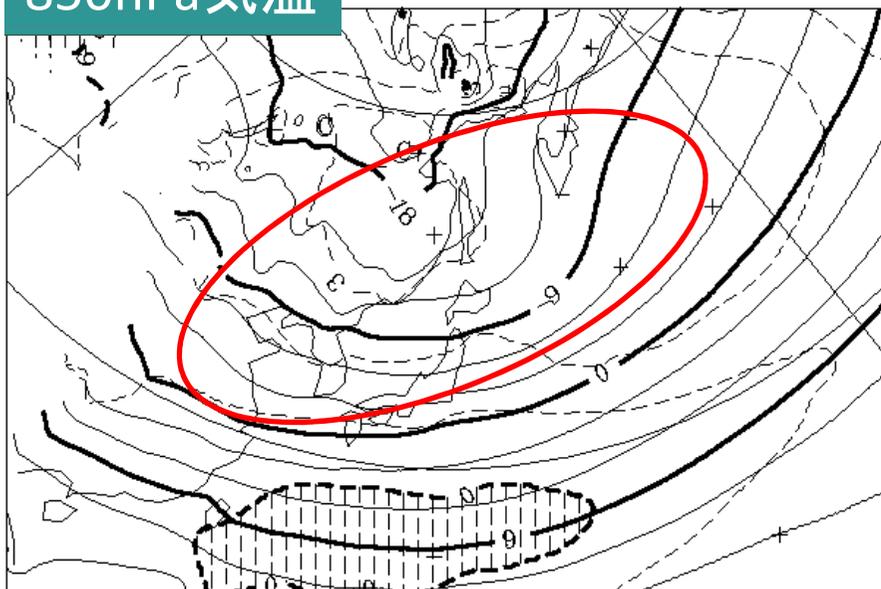
日本の南に低気圧性循環偏差で、太平洋側や沖縄・奄美に湿った空気が入りにくい。また、アリューシャン近海に高気圧性循環偏差。

500hPa高度



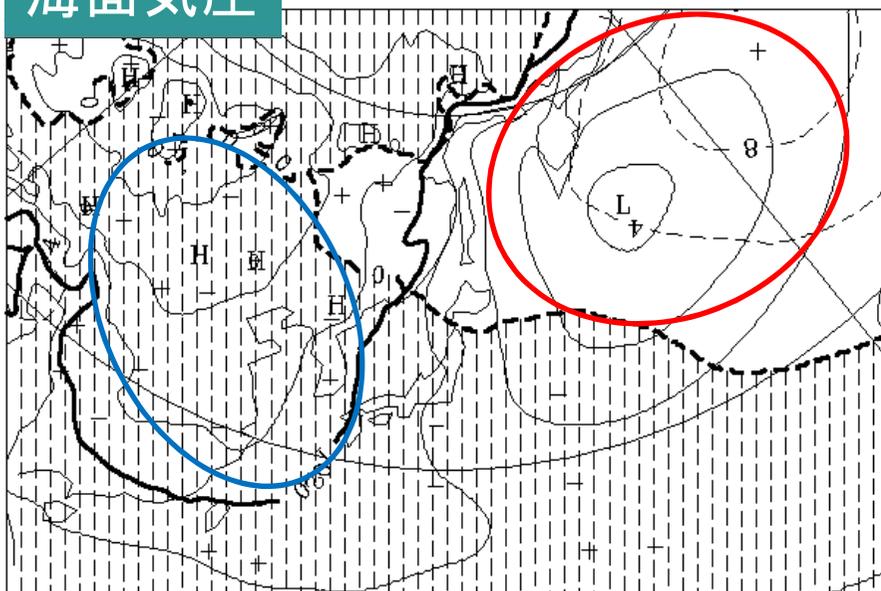
極渦がカナダの北で強い一方、中緯度帯は正偏差で、中緯度への寒気の流入が弱い正のAOのパターン。華北付近からアリューシャン近海にかけて正偏差が強く、北日本は正の高偏差確率50%以上の領域に覆われ、寒気の影響を受けにくい。しかし、日本付近ではスプレッドが大きいことに留意。一方、日本の南から東にかけては負偏差域が広がる。

850hPa気温



日本付近は、北日本を中心に広く正偏差域に覆われる。モデルよりもインドネシア付近の対流活動の影響が強くなると推察し、日本付近の高温傾向は弱めて考える。

海面気圧



アリューシャン低気圧が弱く、シベリア高気圧も弱いので、冬型の気圧配置が長続きしない。しかし、南岸低気圧の活動は弱い傾向のため、北・東・西日本太平洋側と沖縄・奄美の天候の偏りは小さい、と考える。

想定される天候

- ・ 北日本日本海側では、冬型の気圧配置が続かないため、平年に比べ曇りや雪の日が少ないでしょう。
- ・ 東・西日本日本海側では、冬型の気圧配置が続かないため、平年に比べ曇りや雪または雨の日が少ないでしょう。
- ・ 北・東・西日本太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
- ・ 沖縄・奄美では、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

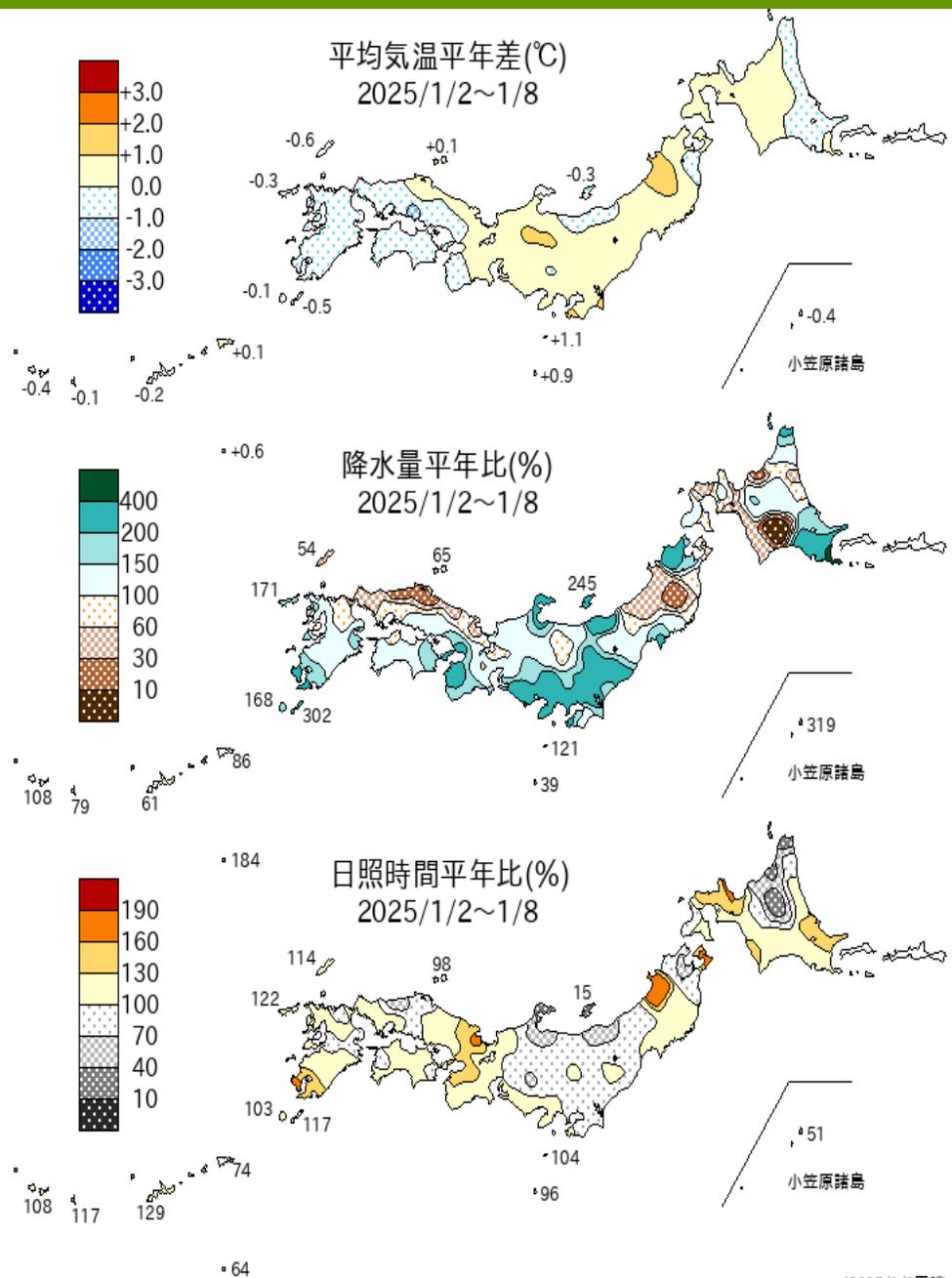
<気温>

- ・ 寒気の影響が弱いため、北日本では高温、東日本では高温傾向。西日本と沖縄・奄美ではほぼ平年並。

<天候>

- ・ 北・東・西日本日本海側では、冬型の気圧配置が続かない。

最近1週間の天候経過



最近1週間(1月2日~1月8日)は、期間のはじめは北日本を中心とする冬型の気圧配置で大雪となった所がありました。その後、冬型の気圧配置は緩み、6日には日本海と本州南岸の低気圧の影響で、北・東・西日本太平洋側でも雨や雪が降りました。低気圧の通過後は再び冬型の気圧配置となったため、大雪となった所があり、西日本日本海側の平地でも雪が降りました。沖縄・奄美では低気圧の影響が弱く、降水量が平年を下回りました。気温は全国的に平年に近い値となりました。